

一般選抜前期入学者選抜における調査書の活用について

吉村 幸 (長崎大学)

高大接続システム改革会議「最終報告」(2016年3月31日)を受け、一般選抜(一般入試)でどのように調査書を利用するかが本学の課題となっている。我々は、調査書の(1)学習成績概評、(2)特別活動の記録、(3)指導上参考となる諸事項に着目し、これらの事項の内容の特徴や入学後の成績との関連の検討、調査書記載内容に関する高校へのヒアリングを行った。本稿ではその結果をふまえた本学での一般選抜での調査書の活用方法の例を報告する。

1 はじめに

高大接続システム改革会議「最終報告」(2016年3月31日)は、「学力の3要素」を多面的・総合的に評価するものに改善することが必要であるとし、特に一般選抜については「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」をより適切に評価するために「調査書」や「高等学校までの学習や活動の履歴」、「学修計画書」などの資料の積極的に活用することを求めている。

本学は、上記の方針を踏まえ検討した結果、調査書の学習成績概評を用いることを決め、H31年度入学者選抜要項(H30年6月公表)において2021年度入学者選抜の一般選抜で調査書に配点すること、又面接又はペーパー・インタビュー(面接に代わる筆記試験)を課すこと等の基本方針を予告した。

本稿では調査書の活用についての基本方針を定めるにあたってどのような検討を行ったかを報告する。

2 調査書裏面記載事項の検討

上で述べたように、2021年度入学者選抜から「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価するにあたって調査書等を積極的に活用することが求められている。

「調査書を積極的に活用する」を裏面の記載事項を活用するというメッセージととらえ、まず裏面の記載について高等学校へのヒアリング¹⁾で得られた意見を考慮して活用可能性を検討した。

調査書裏面には、出欠の記録、特別活動の記録、指導上参考となる諸事項((1)学習における特徴等、(2)行動の特徴・特技等、(3)部活動、ボランティア活動等、(4)取得資格、検定等、(5)その他)、総合的な学習の時間の内容・評価、備考が記されている。

出欠の記録については、皆勤については評価してもよいのではないかと声もある一方、怪我・病気その他様々な事情があるので入学者選抜に利用すべきではないという高校教諭の声もあり検討の対象とはし

なかった。

総合的な学習の時間の内容と評価は、SHH やSGHの指定校では具体的に書かれており充実しているが、指定校以外では形式的なものも多い。

また、評価は点数や段階ではなく文章で書かれており活用が困難であるが、さらに、例えば、1年次「進路意識を高めた」、2年次「進学への意識を明確にした」、3年次「自己の考えを明確に表現できる能力を身につけた」のような形式的でよく似た記述が多く見られる。個人差が全くない高校もあり、調査書活用の検討の対象にはしなかった。

「総合的な学習の内容と評価」の他は「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」について評価したと主張できそうな項目であると考え、まずそれらの記載内容の分析・検討を行うこととした。

2.1 指導上参考となる諸事項(1)と(2)

指導上の参考となる諸事項(1)(2)は文章表現であるため大量に採点しなければならない一般選抜では活用可能性が低い、学習態度、行動特徴を記述する欄なので、学修態度(出席、レポート提出等)が強く影響する大学での成績を予測するものとして利用できると考えた。もし大学の成績との関連が強い単語やフレーズが見つかれば採点効率があがり、実用への手がかかりとなるかもしれない。

そこで、ある年度に入学した経済学部412名分の調査書データのマイニングを行った。ソフトウェアはText Mining Studioを用いた。データクリーニングの程度は粗い。

述べ単語数が8034、単語の種類が1638、異なる単語の割合は20.4%だった。用いられる単語は多様ではない。高校教諭からは調査書記述のテンプレートがあると聞いているがそれを反映する結果となった。

対象となった学生を1年前期のGPAによって「3以上(62名)」、「2.5以上3未満(84名)」、「2以上2.5未満(104名)」、「1以上2未満(92名)」、「1

未満(13 名)」の 5 グループに分け、それぞれに特徴的に出現する言葉を抽出した。それぞれに特徴的な単語(係り受け)は次の通りである。

- ・「3 以上」…成績-収める, 物事-取り組む, 意欲的-取り組む, など
- ・「2.5 以上 3 未満」…責任感が強い, 礼儀正しい, 意欲的-学習, 積極的-参加, など
- ・「2 以上 2.5 未満」…学習-取り組む, 周囲-信頼, 努力-惜しむ+ない, など
- ・「1 以上 2 未満」…冷静-沈着, 仕事-やり遂げる, 熱心-学習, など
- ・「1 未満」…進路実現-向ける, 意見-左右+ない, 意欲的-取り組む+できる, など

とらえようによっては GPA と調査書に記載されている内容との間に連関があるように見える。GPA が「3 以上」のグループでは「成績を収める」「意欲的に取り組む」のように具体的な事実を反映する記述となっている一方、「1 未満」では同じような表現だが「意欲的に取り組むことができる」と可能性として記述している。他にも「指導-受ける」, 「弱点教科-克服」, 「添削-指導」などが特徴的に見られ, 高校での学習に苦勞したことをうかがわせる。結果は非常に興味深いものだが, 高校教諭からは記入者の主観や筆力が影響するので使うべきでないという意見が複数あった。また, 上述の作業を入試で行うことは現実的でない。

2.1 特別活動の記録および指導上参考となる諸事項(3)と(4)

指導上参考となる諸事項(1)と(2)には文章で記載されているという難点があるが, これに対し(3)と(4)は取得資格, 検定等であり, 客観的な事項が端的に記載される。また, 特別活動の記録も, 例えば「生徒会長」, 「〇〇委員」など同様である。

これら客観的事実は教員の主観に基づく文章表現よりも, 入学者選抜における評価指標として適切である。そこで, 特別活動の記録, 及び指導上参考となる諸事項(3)と(4)の記載内容の活用について検討した。結論からいうとこれらは以下にあげる理由で現状

では使えない。

特別活動の記録に記載されている委員や係の名称が高校によって多様すぎる。例えば, 生徒会役員であったことを評価しようとしても「生徒会役員, 生徒会常任委員, 生徒会長, 生徒会総代, 生徒会副会長, 生徒会執行部, 生徒会〇〇委員長, 生徒会〇〇局長」などがあり, また〇〇には高校独自の名称が用いられている。委員等の頭に「生徒会」がついているので生徒会役員として認識しているが, 「生徒会」を付さない高校があるかもしれない。その生徒が生徒会等でどんな役割を果たしたのかについては個別高校に確認するしかないことがわかった。

さらに付け加えると, 「生徒会長が評価されるのであれば, 任期を短くして生徒会長経験者の数を増やすこともできる」という高校教諭もいた。

また, 「(3)部活動, ボランティア活動等」では, 記載されている部活動の成績がどのレベルのものなのか, その生徒がどのような役割を果たしたのかは分からない。ある高校教諭からは「キャプテンや部長であったという生徒は別として, 大会等の成績で評価することはやめておいた方が良い。」と忠告された。

また, 同じ競技を行う場合でも高校による名称の違いもあれば, そもそも何をやる部活動なのかが分からない場合もある。ボランティア活動も生徒が自主的に行き学校に報告しなければ, それがいくら立派なことであっても調査書には記載されない。

(4)取得資格, 検定等については, 表記のゆれの問題がある。例えば実用英語技能検定であれば「文部科学省認定実用英語技能検定」「英語検定」「英検」

「STEP 英検」のような書き方が行われている。実用英語技能検定の成績を評価したい場合, まずこの表記の揺れを統一しなければならない。また, 資格等認定機関の名称の不統一もある。「潜水士」を例にあげると, 「安全衛生技術試験協会」, 「公益財団法人安全衛生技術試験協会」, 「厚生労働省九州安全衛生技術センター」の 3 種類があった。最初の 2 つは同じものと判断できるが, 3 つ目については詳細を調べなければ同じものかどうかの判断はできない。申告された資格および資格認定機関が一致しないケースもある。

「全国水産高等学校協会, 高等学校潜水技術検定 2 級」に民間のダイビングスクールのライセンスを証明書類として添付したケースについて高校に問い合わせたところ, 民間に委託しているとのことだった。

なにより問題となるのは, 資格, 検定の種類の多さである。例えば最近過去 2 年間の本学水産学部 AO 入試で提出された資格・検定は 107 種あった(同じ

資格でも級や種が異なるもの、認定機関が異なるものは別種類として数えた。)。様々なご当地検定や産業振興を目的とした検定（例えば枕崎カツオマイスター、熊本水検定、日本さかな検定）、さらに今後創設されるものを想定すると、全ての資格、検定を入学者選抜以前に把握しておくことはまず不可能であり、DB化すればよいという単純な発想では資格、検定の利用はできない。

3 調査書表面記載事項の検討

調査書の表面には各教科・科目の単位数と評定、評定平均、全体評定平均、学修成績概評(A,B,C,D,E)及びその分布に関する情報が記載されている。なおAの中でも特に成績の良いものにはAを○で囲んで良いこととなっている(以降AAとする)。

高校教諭へのヒアリングから、評定値の内訳は期末考査の成績と「平常点(=学習に向かう態度や意欲等)」の合計で決まるものであり、その全体平均値が高い生徒は(特にAA)、どの教科・科目についても手を抜かず定期考査への準備も含め、種々の課題に真面目に取り組んだ生徒であると言えることが分かった。

評定はあくまでも高校内での評価なので、学習態度が悪ければ、いくら模試等の成績がよくても評定値は高くない。「評定値と実力は別である」と表現した高校教諭がいた。また「Cの子はダメだ」という教諭もいた。評定値の高さは、学習態度が良いことを担保すると言える。

そもそも「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」が示すものが何なのか明白ではないのだが、平均評定値には、何事にも前向きに自ら取り組む学習態度が反映されるので、学修成績概評や全体評定平均値、教科・科目ごとの評定平均値を入試で用いることで、ある程度は「学力の3要素」を多面的・総合的に評価したと言ってよいのではないかと。医師国家試験合格率、学内成績、進級状況において、AA>A>B>Cの傾向が見られることを報告する先行研究がある(平野他,1996;小橋他,1996;平野他,1998)。他にも、卒業論文の成績不審者はほとんどが「C」を報告する先行研究もある。

しかし一方で、調査書の評定を入試で利用する場合、必ずと言っていいほど「高校間格差」を巡る議論が起こる。

受験産業業者は各高校に偏差値を与えているのだが、偏差値が高い高校の「A」とそれよりも偏差値が低い高校の「A」とでは価値が異なるので利用すべき

でないという議論である。

この問題意識のもと、標準化された尺度の作成を試みた例もあるが(倉元他,2002)、広く利用されているわけではない。

「高校間格差」の問題があったとしても、調査書の評定は表記の揺れもなく最も機械的な点数化が可能な資料である²⁾。実現可能性の観点から言えば一般選抜(一般入試)で調査書を活用するとなると学修成績概評や評定平均値を用いること以外に選択枝はないだろう。

しかし、実現可能性の観点だけで入学者選抜を行うわけにはいかない。そこで、学修成績概評を入試に利用することの妥当性を検討した。

対象は2014~2016年度の九州・沖縄地方の高校を卒業した一般選抜前期入学者(3年度、全学部)である。

まず「高校間格差」がどのように現れるのかを確認するために、高校を入学偏差値で3つのグループに分けた(偏差値60以上、50以上60未満、50未満)。そしてグループそれぞれの調査書の学修成績概評別に2年前期時点でのGPAを箱ひげ図(箱中の線は中央値)で表示した(図1)。

図からわかることとして以下が指摘できる。

- ・全体の傾向として学修成績概評が良いほど大学での成績がよい。
- ・AAでは高校の偏差値によらず大学での成績が良い(高校間格差を考慮する必要はない)。
- ・同様のことがAでも言えるが若干の高校間格差が見られる。
- ・概評Bで高校間格差が明白にみられる。

この結果は、大学での学修成果(教養課程の成績)には高校での学習態度が反映され、AAやAにおいてはいわゆる「高校間格差」をそれほど考慮せず同等に評価しても問題なさそうであることを示すものと言えよう。

ところで、例えばセンター試験と個別学力検査の総合点(入試の成績)だけで選抜した場合、入試の成績と入学後の学業成績との相関は小さくなり(選抜効果)、このことにより選抜に用いられなかった資料、例えば調査書の評定平均値と入学後の学業成績との相

関が相対的に高くなることが知られている。

小嶋他（1991）は選抜効果を考慮した上でも教養部の成績と平均評定値との間に相関が見られることを示し「高校間格差や浪人中の学力変化を反映しないこと等の問題点によって、調査書の予測力（教養部の成績）が失われるわけではないことは、注目に値する」と述べている。

以上をふまえると、例えば、合否のボーダーであれば概評が C の生徒を入学させるよりも、概評が AA や A の生徒を入学させた方が大学にとって好ましい結果となる可能性が高くなるのではないだろうか。

具体的な適用方法は様々考えられるが、現状では学習成績概評や評定平均値や評定値に点数を与え、機械的に処理することが一般選抜における調査書の最も現実的な活用法と考えられる。

そこで、このことについて確認するために実際の入試データを用い、調査書の学習成績概評に配点をした場合のシミュレーションを行ってみた。

4 実データを使った入れ替わりのシミュレーション

ある年度のある学部データのデータについて、調査書に 25 点、50 点、100 点をそれぞれ満点として配点し、各概評の段階別に満点の 100%、80%、30%、0%を与えた場合、どのように合否が入れ替わるかを確認した。（特に根拠はないが、図 1 を参考に配点の割合を定めた。）なお、25 点、50 点、100 点はそれぞれ配点後総合点の 1.9%、3.7%、7.1%となる。

この学部ではセンター試験の成績と個別学力検査の総合点で選抜を行っており、満点は 1300 点である。この年度の受験者は 440 名、合格者 305 名、入学者 286 名であった。

表 1-1～表 1-3 に入替わりで不合格となる者、合格となる者について

- 調査書の概評、
- 高校ランク、
- 得点率（1300 点満点）の統計情報
- 入替わり不合格者のうち累積 GPA が 2 未満の者の割合（人数）

を示した。

合否入替わりの対象となったのは配点 25 点で 3 名、50 点で 7 名、100 点で 9 名であった。9 名は合格者全体の 2.9%に相当する。

表 1-1～1-3 に示されているように、当然ではあるが入替わり不合格者の調査書は B か C であり、入替わり合格者の調査書はすべて A である。

高校ランクに着目すると、ランクが高い高校同士

で合否が入れ替わるより、異なるランク間で合否が入れ替わるケースが多くこの点は興味深い。

調査書への配点が 25 点、50 点の場合、ペーパーテストの点数による「学力」には大きな差があるとは言えない。

100 点を配点した場合では入替わり不合格者の得点率の最大値と入替わり合格者の得点率の最小値のレンジが約 5%ある。これに対する評価はそれぞれに異なるだろうが、それでも平均値でみると差は 2%でしかなく大きな「学力」差があるとは言い難い。

母数が小さいので積極的に解釈すべきではないが、累積 GPA が 2 未満の者の割合の特徴を指摘する。

表 2 は、累積 GPA が下回る者の割合と人数を入学者全体について調査書概評別に集計したものである。この学部では入学者の 34.7%全体の累積 GPA が 2 を下回っているのだが、表を見れば分かるように評定が低いほど累積 GPA が 2 を下回る者の割合が多い。このことと、表 1-1～表 1-3 に示した累積 GPA が 2 を下回る者の割合（配点 100 点で 44.4%、50 点で 57.1%、25 点で 67.7%）を合わせて考えると、（あくまでも「たれば」の話ではあるが）配点を 100 とした場合でも入学者の学修成績は表 2 の状況よりも改善されることが期待できる。

合否のボーダーラインでのこのような調査書の使い方は、より好ましい学生を選抜するという観点で有効に働く可能性がある。

5 おわりに

本稿では、一般選抜前期日程における調査書の活用方法についての検討を行った。

まず、調査書裏面については以下の問題があることを指摘した。

- 総合的な学習の内容と評価：SHH や SGH 指定校に有利であるなど公平性に欠ける。内容や評価が形式的であるケースがみられる。
- 特別活動の記録：高校独自の表記が多く、内容が分からない。
- 指導上参考となる諸事項(1)(2)：文章による記載であり短時間で評価できない。教師の主観、筆力が影響する。高校からも評価の対象として欲しくないという声があがっている。
- 指導上参考となる諸事項(3)(4)：あげられた事項の価値が分からない。代表的な資格や検定ですら表記が一定しない。資格や検定を網羅しきれない。

加えて、学習成績概評に応じて機械的に得点を与

えるシミュレーションを行い、ボーダーラインでどのように機能するかを確認した。

以上を総合的に考えると、現状では学習成績概評や評定平均値や評定値に点数を与え、機械的に処理することが、調査書の一般選抜における最も現実的な活用法と考えられる。

しかし一方で、調査書の活用について文科省は、「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」（2017 年 7 月 13 日、改正 2018 年 10 月 22 日）の中で、「『学習成績の状況（調査書平均点）』だけでなく、部活動やボランティア活動、特別活動の記録や総合的な学習の時間の内容・評価など、調査書の他の記載事項も有効に活用する。」としている。つまり、調査書の裏面も活用するよう求めている。

この点については、2016 年 3 月 31 日高大接続システム改革会議最終報告(2016 年 3 月 31 日、p.50)で、

- 個別大学における入学者選抜改革を推進するため、各大学において、アドミッション・オフィスの整備・強化やアドミッション・オフィサーなど多面的・総合的評価による入学者選抜を支える専門人材の職務の確立・育成・配置等に取り組むことが必要である。（中略）国においても、効果的な財政支援等を通じて、各大学の入学者選抜改革を促す。
- あわせて、国は、各大学の入学者選抜改革における課題を分析した上で、次期学習指導要領改訂の動向にも留意しつつ、「思考力・判断力・表現力」や「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」をより適切に評価する評価手法など、今後特に重要と考えられるテーマに関する調査研究等に取り組むとともに、その成果を普及する。

と述べられており（下線は著者による）、実際に国は、本稿 2 節で指摘したような事柄を踏まえ、調査書の電子化、共通ポートフォリオの開発など、調査書の裏面に相当する情報を入学者選抜に活用できるような仕組みの開発に取り組んでいるところである。

本稿で述べたように、現行の調査書では裏面を一般選抜で活用することは現実的ではない。国による条件整備の目処が立った段階で具体的な検討を始めればよいだろう。

なお本学は、調査書の評定のみで「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を適切に評価できるとは考えておらず、全入試区分で面接又はペーパー・インタビュー（面接に代わる筆記試験）³⁾を課すことを入学者選抜の基本方針に盛り込んだ。この基本

方針は 2018 年 6 月末に 2 年前予告として公表している。

注

- 1) 高校へのヒアリングは千葉大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、熊本大学、長崎大学によるプロジェクトで実施しているものであり、H28 年度、H29 年度の 2 年間で合計 85 高校が対象となった。詳細は高校によって様々ではあるが、本稿では全体を大まかにまとめた傾向を述べている。
- 2) 本学では合否判定の際の情報として利用できるよう志願者の学習成績概評が入力されており、配点と各評価値への重み付けさえ決めれば直ちに利用可能な状態になっている。
- 3) ペーパー・インタビューの詳細について関心のある方は筆者にお問い合わせください。
(osamu@nagasaki-u.ac.jp)

参考文献

- 平野光昭, 渋谷晶三 (1996) . 「高校調査書に記載された成績及び諸活動と医師国家試験の可否の関係」『大学入試研究ジャーナル』 6, 76-83.
- 平野光昭, 浅香昭雄, 北原哲夫 (1998) . 「面接の評価及び高校調査書は入学後の成績をどこまで予測するか」『大学入試研究ジャーナル』 8, 67-75.
- 小橋修, 徳永蔵, 山村則男, 金関毅 (1996) . 「入学者選抜方法, 高校評定値と学内成績, 医師国家試験成績の追跡調査」『大学入試研究ジャーナル』 6, 92-97.
- 小嶋秀夫, 村上隆 (1991) . 「入試成績と教養部の成績との相関関係: 3 年度分の結果」『大学入試研究ジャーナル』 1, 27-31.
- 高大接続システム改革会議「最終報告」(2016) . 倉元直樹, 川又政征 (2002) . 「高校調査書の研究 — 「学習成績概評 A」の意味 — 」『大学入試研究ジャーナル』 12, 91-96.
- 文部科学省 (2017, 2018) . 「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」
- 中村鉦司, 山崎正吉 (1991) . 「高校調査書概評「A」と「A」の実態について」『大学入試研究ジャーナル』 1, 48-52.

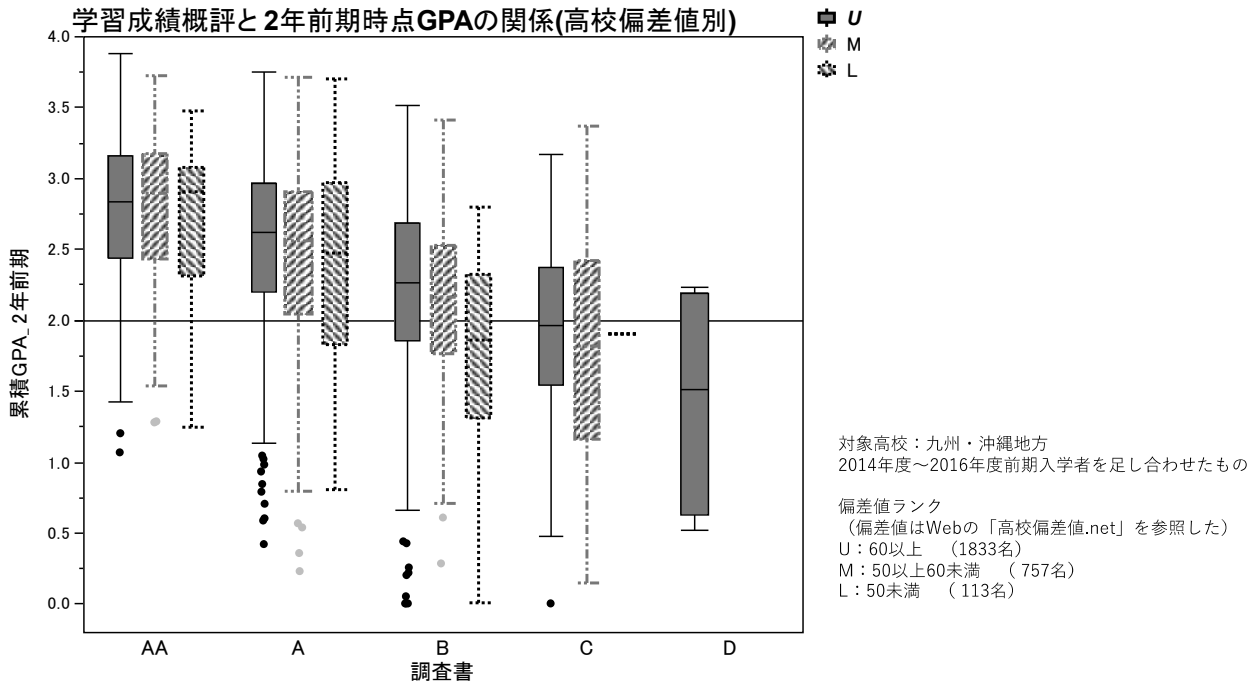


図1 調査書学習成績概評と2年前期時点でのGPAとの関係 (高校偏差値ランク別)

表 1-1 配点を 20 点とした場合の入替わり状況

配点25の場合：入替わり3名		入替わり不合格	入替わり合格
調査書	累積GPA2未満の者	66.7%(2名)	—
	AA, A	—	3名
	B	1名	—
高校ランク	C	2名	—
	U	3名	1名
	M	—	2名
得点率	L	—	—
	平均	48.6	48.0
	最大	48.8	48.6
	最小	48.6	47.9

表 1-2 配点を 50 点とした場合の入替わり状況

配点50の場合：入替わり7名		入替わり不合格	入替わり合格
調査書	累積GPA2未満の者	57.1%(4名)	—
	AA, A	—	7名
	B	5名	—
高校ランク	C	2名	—
	U	7名	1名
	M	—	5名
得点率	L	—	1名
	平均	48.8	47.5
	最大	49.3	48.6
	最小	48.6	46.8

表1-3 配点を100点とした場合の入替わり状況

配点100の場合：入替わり9名		入替わり不合格	入替わり合格
調査書	累積GPA2未満の者	44.4%(4名)	—
	AA, A	—	9名
	B	4名	—
高校ランク	C	5名	—
	U	9名	2名
	M	—	6名
得点率	L	—	1名
	平均	49.1	47.0
	最大	50.1	48.6
	最小	48.6	45.0

表2 調査書概評別の累積GPAが2未満の者の割合

調査書	AA+A	B	C
人数	123人	137人	24人
累積GPA2未満の者	22.8%(28名)	41.6%(57名)	54.2%(13名)